

My Town Cello Townが合言葉

市民が育てる文化・まち

特定非営利活動法人チェロ・コンサートコミュニティー事務局 小澤 尚弘



はじめに

2006年11月、「ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール」が八王子で復活を遂げた。

ガスパール・カサド氏は20世紀を代表するチェリストの一人で、その妻は日本人ピアニストの草分け的存在の原智恵子氏。カサドの死後、1969年から原氏の主宰により、二人が住んでいたイタリア・フィレンツェで開催され、以後10回1990年まで続き、ミッシェル・マイスキーや上村昇、向山佳絵子などの名チェリストを輩出してきた名門コンクールである。

しかし、原氏が体調を崩し日本に帰国するとやむなく中止となってしまった。帰国後の原氏は、晩年多摩地区で過ごし、本コンクールの日本での復活を願っていたが、2001年12月に帰らぬ人となってしまった。そんな事情を知った八王子の市民有志が、本コンクールの復活に向け立ち上がった。

この報告は、そんな市民の行動がきっかけとなり、行政との「協働」により実現したコンクールの経過と、コンクールを通じた「協働」の今後の課題と展望を、チェロ・コンサートコミュニティーの事務局として記すものである。

1. コンクール復活まで

(1) コンクールの企画が生まれるまで

八王子市民有志が立ち上がり主導したコンクール復活の発起人であり、フラッグシップを取ったのが、日本の音楽著作権の普及啓発等に尽力したギタリスト、浜坂福夫氏である。

氏は八王子市に転居して間もなく、八王子市長と八王子の文化関連団体が組織している八王子文化連盟の会長との対談が掲載された広報紙を読み、その対談のテーマであった「八王子の国際化」に、「自分のできること」で貢献したいと思った。そして、時を同じくして、カサド・コンクールの中断に関することや、主宰者は日本人ピアニストであることなどの情報を手に入れ、「カサド・コンクールの復活」という企画を思いついたのである。

八王子を終のすみかとし、音楽家として国際化を通じた地域活性化に役立ちたいという氏の熱意に、友人が友人を誘い、またその友人が友人をという形で賛同者が集まり、2002年3月に、本コンクールに関する初めての会合が、意見交換会として実施される。

この時すでに、市の職員が多数参加している。その経緯については現在、本事務局では情報を有していないので断定はできないが、おそらく、当時から行政の支援が必要であるという認識で

は全員が一致していたと思われ、賛同者を募るなかで、市の職員などにも声をかけたものと思われる。そして、この意見交換会が毎週のように開催される中で、いろいろな企画に対する問題点や不安点などが指摘されている。

当時の資料には、後述する資金面の不安よりも、八王子で行う大義名分がないことへの不安や疑問が書かれている。「なぜ八王子で、チェロなのか、カサドなのか」。筆者の見解では、この先も特定された一つの答が見つかることはないだろう。そのような直接的な大義などなく、もっと大きな「街」に対する「活性化したい」という単純な願いであるのだと筆者は考える。この事については後述する。

そして次に不安視されているのが、「浜坂」という人間を八王子の市民や経済界が知らないことである。企画提案者がどのような人で、なぜ提案したかが理解されにくい。そこで、意見交換会では、「浜坂の市民デビュー」とコンクールの正式提案を兼ねた会合等を持つべきであるとの意見が出され、2002年4月下旬に実施が計画されていた「浜坂福夫氏の芸能功労者賞パーティー」をその場とすることとした。また、市長に対する企画説明が必要であることも併せて検討され、2002年4月上旬に市長へのコンクール企画の提案説明が浜坂氏より行われているが、この時の行政のスタンスは「企画が具体化したら協力する」というものであり、事実上、市民レベルの活動を維持し、企画運営していかなければならないこととなった。そんなこともあり、意見交換会には市民の参加が増え、市民準備会の形をなし始めた。毎月の会合を重ねて、2002年7月に「国際チェロコンクール市民準備会」が発足した。代表に浜坂氏、その他、事務局長などの役員に市役所職員が選任されている。但し市職員は、あくまでも市民としての活動であり、職員としての職務ではない。当初企画では、2004年11月の開催を目指すこととした。

(2)「資金ゼロ」からの活動

しかし活動を始めてみたものの、市内の評価や認知度は、「単なる夢物語」というものが多く、賛同者もまた半信半疑であったことは間違いない。何故ならば、コンクールのスケールが今までの「市民活動」と言われるものの範囲を超越しているからだ。総事業費が約1億円、期間は10日程度で、「国際」と銘打つ以上世界が相手である。想像しただけでも大変なことは素人でも解る。

一番の課題は、資金の確保であった。コンクールはいくらチケット収入をみたとしても、総予算の10%程度にも満たない。あとは寄付金、あるいは企業等による協賛金、市民から集める会費に頼るほかないのが現状だ。

しかし、この課題を抱えるのは、資金源に乏しい市民団体が発起したがゆえである。国内で行われている他の国際音楽コンクールは、その殆どが行政主催であり、本コンクールに比べれば資金源は豊富だ。なぜ行政主催かというと、文化的価値はきわめて高いがその半面、興業ではないために収益が期待できないので、営利団体や市民レベルで実施することはまず考えられないからである。事業経費の内訳は、審査員の渡航費に宿泊費、審査料にはじまり、出場者への旅費補助と宿泊費、賞金。予選にかかる伴奏ピアニストの出演料に調律代、本選のオーケストラ出演料。以上でおおよそ6割を占めてしまう。残りは、事務局運営にかかる経費や、パーティー等の催事経費、看板作成等の装飾経費などである。以上のように、出費するばかりのコンクールは、今までに市民団体によって主催された例は極めて少なく、世界で初めてと言っても過言では無いくらいの挑戦である。そんな挑戦を始めてみたものの、やはり資金の確保は想像通りの苦境に陥る。必然的に「行政」の関わり、すなわち八王子市及びその外郭団体である八王子市学園都市文化ふれあい財団(以下「ふれあい財団」)から、資金的支援及び協力をどの程度得られるかが焦点であった。

まず、約5,000万円以上の寄付金や協賛金を市民団体が集めるうえで、行政がバックに付くことによる信頼度の確保は重要な要素であった。また、市民から資金的支援を得るうえでの会員制度にも、行政の関わりによる信用度の確保は大いに必要であった。当時の会員制度は、運営を支える市民で構成する「運営会員」や、資金面で協力する「基金会員」などの会員種別があったが、

思うように会員数が集まらないのが現実であった。

結果として後述のように、行政の支援が正式に認められ、支援が表面化した実行委員会の設立以降、対外的な反応が違ってきたことは事実である。

(3) 市民の認知

その翌年、市民準備会は新たなステージへと移る。それが組織のNPO法人化である。社会的な認知度を高め、企業等からの協賛金獲得、行政との関係性強化が最大のねらいである。また同時に、資金不足、認知不足などを理由にコンクールの一年延期を決定し、2005年10月の開催を目指すこととした。

2003年6月24日「特定非営利活動法人チェロ・コンサートコミュニティー」(以下「CCC」という)が正式に発足、初代理事長に浜坂福夫氏が就任する。また、設立時の理事が、活動資金として総額約400万円の出資を行った。その後も、「行政」への支援要請を引き続き行うと同時に、「行政」を動かすためには「市民の賛同」が不可欠であることが再認識され、会員制度の再構築と、コンクール開催周知の活動が必要となった。前述の基金会員をCCCの賛助会員へ継承し、コンクールに賛同し資金的支援を目的としたものとした。一方運営会員は、NPO法上の正会員へと移行した。賛助会員の対象は広く、個人、企業・団体と、賛同していただける全ての市民が加入可能とし、それぞれ1万円、3万円の会費でスタートした。やはり、この時点でも正式な行政の支援体制もなく、一部の市民有志の活動であることから、なかなか市民権を得ることができなかった。そこで、主要な企業や団体の社長や代表、芸能関係の方や有識者など、コンクールに賛同していただける知名度の高い方々のお名前を借り「コンクール賛同人名簿」の作成に取りかかった。そしてこれを使用し、会員募集並びに協賛金集めを行った。会員数は最大で約400名近くを確保するまでに発展し、CCC運営の資金源にもなった。

その他、コンクール開催の継続的な周知とコンクール開催の資金確保のために、同年10月に「チャペルコンサート」を実施した。当初計画では、チャペルコンサートの収益金はCCC内の基金に積み立て、コンクール開催の資金にしようと考えていたが、事業を営むための管理運営、すなわちランニングコストは当初の想定以上にかかることになり、チャペルコンサートの収益金は殆ど全て管理運営費に充てられた。

このチャペルコンサートが実現できたのは、会場である八王子ホテルニューグランドやその運営会社である株式会社サン・ライフの多大なご協力があったからこそである。この協力関係は、浜坂理事長をはじめサン・ライフ関係の理事からの協力要請により築いたものである。今思えば、このコンサートシリーズを実施していなければ、CCCの存在は立ち消えになってしまったと思う。このコンサートを毎月実施することにより、コンクール開催の周知の場を創出することができる。また、会員を勧誘する材料となり、CCC継続のためのランニングコストを稼ぎ出すということから、過去も現在も、なくてはならないCCCのメインイベントとなった。開催以前の理事会議事録には、チャペルコンサート開催について疑問視する意見が多数出されている。というのも、チケットの販売は自ずとCCC理事とそれを支える人々によって、足を使ってさばかなければならないし、毎月売らなければならないという困難さが、開催へ前向きな姿勢を示しづらい要因となっていた。それでも、浜坂理事長を先頭に実施を決定、チケット販売も当日のもぎりやプログラム配布も、



第1回チャペルコンサートの模様(2003年10月21日・八王子ホテルニューグランドにて)

全て理事自ら行き、本稿執筆時点で38回を重ねるまでに成長した。

その他、チャペルコンサート同様に今ではCCCの大きな事業の一つとなっている「若きチェリストによる交流コンサート」を同年8月に実施する。この交流コンサートは、チェロを習う小中高生による発表の場を提供し、彼らの相互交流を図ると共に、底辺からコンクール開催の周知を図ることが目的だ。

CCCの事業活動は、前述の趣旨や効果はあるにせよ、実際には「行政」へのアピール活動に他ならなかった。というのも、当初から「行政」の関わりを要請するものの、返ってくる答は「市民の理解を得られるかどうか」、「実際に実現可能なかどうか」というものであった。

したがって、「市民の賛同がどの程度得られ、資金がどの程度集まるのか」ということに答えるために、会員の拡大、そのためのコンクール周知、特に将来の社会の担い手への周知等、徹底して市民への賛同と企業等を含む市民参画を求めた。しかし一方で、当時の八王子市に文化価値の判断基準はあったのであろうか。文化価値をどのように判断し決定し、またその決定に際し、どのような基準があったのか。

実際、当時八王子市に明確な文化振興に関する方針がなかったことは事実である。文化振興に関する政策の策定、計画、展開がなく、市民に明示されていなかった。そのため、市民の賛同という言葉で片付けられ、「市」にとっての文化のあり方や文化振興の意味・意義を踏まえた支援の必要性が認識されていなかったと言わざるを得ない。後に文化振興計画が発表されたことが、当時の状況を裏付けていると考える。

そんな流れの中で、CCCは八王子市議会議員に働きかけを行い「八王子市議会音楽愛好議員連盟」の発足を依頼した。市民を代表する議員がコンクールを支援することを明らかにし、市民賛同の面で行政を動かす大きな力になって欲しいと願ったのである。前述のように、文化価値の理解というよりは、市民層の支持の拡大が一番のねらいであった。その結果、当時の正副議長を中心に、超党派、40名全議員による議員連盟が、2003年12月に発足した。このニュースは新聞にも取り上げられ、コンクール開催への前進に大きな影響を与えた。

(4) 協働への一步

ここまで紆余曲折、七転八倒の活動ではあったが前進してきたCCCに、初代理事長であり、何よりライフワークとしてコンクール開催に情熱を傾けてきた浜坂氏の逝去という大きな試練が訪れた。2004年7月のことである。このとき、当然のことながらコンクール復活に向けた「活動の継続か」、あるいはその「断念か」の選択を余儀なくされた。この時の理事会では、「資金面でもかなり厳しい状況であり、また世論の動向も盛り上がりにはいま一つ欠けていた。開催時期は3年程度延ばすべきでないか」、「今回の延期が2度目であることから、1年程度の延期幅におさえないと、本当に実現しなくなってしまう」など、種々意見が出されている。結果は、1年延期をして2006年11月に復活を目指し活動を継続することで一致した。同時に、2代目理事長として活動初期から浜坂氏を支えていた杉本敦子氏(現・理事長)が選任された。この時、活動を中断しようという者は誰もいなかった。内心やめてしまいたいという想いがなかったとは言えないだろうが、言い出した以上、一歩も引けない状況であったことは自明であるし、何よりこの「街」を変えたい、どうにかしたいという強い意志が、活動を継続させることに繋がったのだと筆者は考えている。



第1回若きチェリストによる交流コンサートの模様(2003年8月30日・八王子クリエイイトホールにて)

杉本理事長は、当時も今も次のように述べている。「私たちは文化の種を蒔いているんです。その種が芽を出して、いつの日か大きな樹になっていくように活動しています」この言葉の背景には、この大きくなる「文化の樹」が、八王子を変えてくれるはずだという強い信念があり、彼女と話をすると、それをひしひしと感ずることができる。

そのようにして活動の継続を試みることとなったが、活動開始以降の懸案事項、資金の確保は一向に目処が立たず、また行政の支援も決まらない。ただひたすら周知活動を行っていく日々が、2005年3月まで続くが、ようやく、CCCに大きな転機が訪れた。それが、市内の代表的企業であるオリンパス株式会社からの協賛内諾の返事であった。これによって、2006年復活は一気に現実味を帯びてきた。また、CCCでは独自に、開催年より前倒しで必要となる活動経費の借り入れを行う。その額は、オリンパスの協賛額に勝るとも劣らない額であり、CCCはコンクール開催に向かう覚悟を新たにした。

そして行政の支援は、オリンパス内諾の返事などの状況を見据え正式に決定することとなる。2005年9月には、八王子市、ふれあい財団とCCCが共に構成する「ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール実行委員会」の立ち上げに向け、準備会を開催。翌10月25日には正式に発足した。

このことは、行政と市民団体による「協働」の第一歩が開かれた瞬間であったと思う。更には、「協働」でよくみることのできる事業委託契約などによるものでなく、互いが対等の立場で事業に向き合える構図の「協働」が実現できる基盤を確立したという意味で、互いにとって重要な出来事であった。その他、実行委員会には市民有識者数名を交えた運営体制を整える。また、2004年からコンクール運営プロデューサーとして活動していただいている高森みや子氏にも、引き続きプロデュースを依頼すると共に実行委員としての参画をお願いした。コンクールにおけるプロデュースは、運営形態が単なるコンサートとは全く違うことから、専門知識やその業界でのノウハウを多分に必要とする。そのため、当初から浜坂前理事長によりプロデューサーの必要性が説かれ、同氏の関係者を介して高森氏に運営プロデューサーとして就任していただいた。彼女もまた2年間、この実現するかどうか分からないコンクールの開催意義等を理解し、紆余曲折を体験しながら開催までたどり着いた一人である。

（５）感動の本番

実行委員会が発足してからの活動は、あっという間で、短距離走のように一気に駆け抜けた。2006年1月には、全世界に向けて出場者募集要項を送付した。国際コンクールであれば、通常1年以上前に募集要項を送付し、半年以上前には出場者を確定する。なによりも驚くべきことは、発送の時点で、開催資金の半分も見通しがたっていなかったのであった。

しかし結果的には、募集締切の同年6月末日で24カ国74名の応募があり、この頃には殆ど開催資金の目処は立っていた。蓋を開けてみれば、実質的には第1回目の弦楽コンクールとしては稀にみる応募人数だというから、余計に驚きだった。

同年9月には最終的な出場者が確定、加えて街中でのコンサートを数十回、小中学校でのアウトリーチコンサートを22校、チャペルコンサートは審査員のチェリストを迎えたスペシャルバージョンにするなど、コンクール開催気運は一気に高まりを見せた。

このコンクールにおいて、それまでの地道な市民活動が結実したと確信できる象徴的な出来事として、本選チケットが約3週間余りで完売したことがあげられる。



アウトリーチコンサートの模様

チケット発売の広報を、2006年7月より開始。発売日に向けて各所でアピールをはじめ、会員には事前の優先予約も受け付けるなど、周知活動を徹底した。そして9月9日の発売日には、多くの方がチケット購入に赴き、9月末日には完売状態となった。これこそ市民活動に対する市民の素直な反応なのではないかと心が震えた。「行政」へのアピール活動とはいえ、3年間、チャペルコンサートを毎月のように開催し、会員増強を図り、市内でミニコンサートを開く。石の上にも3年ということわざがぴったり当てはまるようだった。市民は活動を見てくれたのだと思うし、周知活動は無駄ではなく、認識してくれたのだと思う。そして実際にコンクールが実施されることとなれば、興味を示し、チケット購買行動になったと考えている。

11月になると、八王子駅周辺の商店街の協力を得て、コンクール会場のいちょうホールへ向かう通りにはコンクールフラッグがはためき、装いを整え始める。各種メディアでも、コンクール開催が報じられ、既に完売済みの本選チケットの問い合わせがますます増えた。

いよいよ11月23日からコンクールが始まると、予選にもかかわらず、終日満席状態が続いた。第1予選、第2予選、そして本選、入賞者披露演奏会と、期間中、客席は聴衆でいっぱいになり、何とんでも会場が輝いて見えた。来場していただいた聴衆の方々や関係者の中から「八王子でないみたいだ」という言葉も聞かれた。「こんな体験は初めて」と実感していただいたのだと、誇らしく思うべきであろう。いままでのいちょうホールのイメージや、市内イベントとは違った感覚が誰にもあったのだろうが、何がその要因であるのか特定することは難しい。しかし、市民と行政が互いに手を取り、「街」のためにと必死になって取り組んだ事業だからこそ、そこに集まった人々の気持ちが独特の会場の雰囲気を作り、八王子でないような錯覚を起こすほどの輝きがあったのかもしれない。いずれにせよ、これこそ市民活動と行政の協働による素晴らしい成功例と言えるだろう。



当日のコンクールフラッグ

国籍別応募・参加者数

参加者国籍	参加申込数	参加承認数	第1予選	第2予選	本選
日本	14	5	4	3	0
ロシア	10	5	4	3	0
韓国	9	7	4	3	2
フランス	9	5	3	2	0
米国	6	4	3	1	1
中国	4	4	4	1	0
チェコ	2	2	1	0	0
ドイツ	2	2	1	0	0
ポーランド	2	1	0	0	0
セルビア	2	1	1	1	1
アルゼンチン	1	1	1	0	0
ベラルーシ	1	1	1	0	0
カナダ	1	1	1	0	0
フィンランド	1	1	1	0	0
アイスランド	1	1	1	1	0
イタリア	1	1	0	0	0
リトアニア	1	1	1	1	0
ウクライナ	1	1	0	0	0
スイス	1	1	0	0	0
オーストラリア	1	0	0	0	0
クロアチア	1	0	0	0	0
オランダ	1	0	0	0	0
メキシコ	1	0	0	0	0
トルコ	1	0	0	0	0
参加者合計	74	45	31	16	4
参加国合計	24	19	15	9	3

コンクール入場者数

日程	入場者数
第1予選(11.23~11.24)	1,082
第2予選(11.26~11.28)	1,122
本選(12.2)	898
表彰式・披露演奏会(12.3)	782
合計	3,884

注) 本選入場者数はプロジェクト鑑賞を含む

関連事業入場者数

事業名	入場者数
ガスパール・カサド展	1,448
エントランス・ザ・カサド	20,000
若きチェリストによる交流コンサート	650
まちなかコンサート等	10,322
合計	32,420

2. コンクールの使命と課題

(1) 私たちを突き動かしていくモノ

このように、紆余曲折がありながらも、何とか復活までたどり着いた活動であるが、何がそこまで市民有志を突き動かしたのか。

八王子には、豊かな自然、車人形などの古くから伝わる伝統、八王子まつりやいちょう祭りもあり、21もの大学を有する学園都市でもある。しかし、一昔前に織物で栄えたこの街も、今はシャッターを降ろしている店舗が目立つ。さらには、東西南北に広がる広大な土地に新旧地域が形成され、文化が分散しているように感じられる。柱といえる文化はあるのであろうか。

そこで「柱となる文化」とは何なのかと考えていくと、その答が、このコンクールのために集まった市民有志が、おそらく共通して抱く想い「柱となる文化」が欲しいということであり、その具体例が「コンクール」であり、その想いが「使命」であると思う。

「柱となる文化」とは、言い換えれば「市民全員が自慢に思える文化」、つまり市を象徴するシンボルだと考える。本コンクールのキャッチコピーは「My Town Cello Town」である。そこには、八王子市民が海外や他県に出かけたときに、自分の街を紹介する場面に遭遇したら迷わずに、「八王子はチェロの街です」と胸を張って答えていただきたいという願いが込められているのである。

そしてそのねらいは、「我が街を自慢に思うこと」の実現にあり、自分の街がどんな街なのか、どんな良さがあるのかという『街に無関心では何も始まらない』ことを訴えることにある。何も「チェロ」でなくても良いのだ。胸を張って自分の街をアピールできるのであれば、それが一番望ましい姿だと思うし、それがコンクールの描く未来図である。

そして実行委員会が、この事象を実践していくためのシンボルであり続けたいという決意、目的を“私の街の自慢になる”というスローガンに込めている。

(2) 二つの課題

チェロコンクールが使命を果たしていくためには、今後も行政との「協働」による活動が必要不可欠と考えるが、種々の課題があり、今後はこの課題への取り組みと展望づくりが急務である。以降は第1回コンクールを終えての今後の課題を記すものである。

課題の一つは、行政と市民団体の関係性の見直しであり、行政と市民団体の役割分担の明確化である。

今日の八王子市における協働による文化行政は、市民活動が主体となり、その活動を後方支援するという立場で行われていると思われる。一方、市民団体は、行政の助成金などによる資金的支援や、人的支援、事務局提供などの物的支援が欲しいという、むしろ行政がリーダーシップを発揮して欲しいという思いが少なからずあるのではないだろうか。しかし、筆者が行政の協働事業に対する望ましい姿勢として考えることは、支援でもなければ協力でもない。逆に市民団体の協働事業に対するあるべき姿勢も、事業受託という立場を超えないことではないと思う。互いが互いの立場や意見などを理解し、共同して「事業経営」していくことに、本来の「協働」の姿があると思う。本コンクールは、この事業経営を行っていくにあたって「実行委員会」という合意形成ができる「場」を持っている。だからこそ、これからはより一層、コンクールを主体とした「音楽の街づくり」を共に議論し、目的達成のために互いがどの分野を担っていくかということ、真正面から話し合うことが必要であると思う。

もう一つの課題は、担い手の交代ということである。市民団体の世代交代と行政の人事異動に伴い、運営基盤が弱体化してしまうのではないかという懸念と、よりスムーズに世代交代が行われるのかという課題である。携わる人間の意志や熱意だけでは協働事業は一過性で終わってしまうし、更には担い手の世代交代が行わなければ、これも一過性で終わってしまう。

仮に世代が変わった時の問題としてあげられるのは、当初の「熱意」や「決意」などの継承である。NPOをはじめとする市民団体は、もちろん一定のミッション（使命）のために団体を形成してはいるが、創設当時の理念や理想がしっかりと継承されずミッションがブレてしまうことが一番の懸念材料だ。また、行政の人事異動による対応の変化も、同じ不安要素としてあげられるだろう。これは市民団体に限らず、一般の会社でも起こっている問題ではないだろうか。

しかしまた、世代交代が行われなければ、本当に一過性の事業で終わってしまう。新たに参加してもらう人は、少なくとも現任者より若い世代でなければならないであろう。しかし、若い世代に参加してもらうためには、創意工夫を凝らした広報活動を行わなければならないのはもちろんのこと、運営基盤を充実化させておくことが重要であると考え。新たに参加する人が参加しやすい機能を備え、なおかつ仲間内の会でなく、いつでもオープンに参加しやすい雰囲気を作っていくことが必要であると思う。

以上の二つの課題を解決する第一歩として実施していかなければならないのが、組織基盤の強化と、ルール作りであると考えている。市民団体側には世代交代が容易に行えるような規則や制度、更に事業活動に関する記録や情報を保管する必要があるだろう。「協働」を行ううえでは、世代交代を行っても、それに耐えうる行政と市民団体の共通ルール、本コンクールでいえば実行委員会の運営に係る規則の充実化、そして新たな制度設計が必要ではないだろうか。

具体的には、市民団体で必要とされるのは、事業の実施に関する内容をしっかりと文書化することだと考えている。その時々の方針の考え方によって、ミッションにブレが出ないよう、いつでもだれでも確認できるようにしておかなければならないし、そのことによって、携わる人間が共通の認識で事業に取り組めることにメリットがある。また、その時代に携わった理事が、表面化されない事案などを踏まえた活動記録を綴り、備え置くことにより、「理念」、「理想」の継承に役立つのではないかと考えている。

一方、協働のルール作りに必要な事項は、行政と市民団体が共有する長期計画の策定であると考えている。その計画に沿って、互いの役割分担を明確化し、事業を遂行していくことがまずは重要ではないであろうか。

このようなことが、徐々に実施されれば、コンクールを永く続けていくことを目標に据えた運営が可能になると思う。コンクールというのは、継続して初めて意味を成す事業である。というのは、第1回の優勝者がその栄光を、「栄光」として掲げていることができるのは、そのコンクールが続いて開催されていることが絶対条件なのである。

50年、60年先の未来までコンクールを継続させるための「経営」は容易ではないし、すぐに答が見つかるものでもないが、上記の通り、課題を着実に解決していけば、自ずと結果は付いてくると信じている。

おわりに

この他にも、課題はたくさんある。しかし種々の課題に対して、互いに責任を押し付けあうことなく、正面から解決に取り組んでいくとき、新たな「協働」の理想が生まれることを確信している。また、このような課題解決をコンクール運営団体が先陣を切って進めていくことも、コンクールの目指す「私の街の自慢になる」に通じるものがあると思う。願いとしては、「私たちに続きたい」と名乗り出してくれる団体が、一つでも二つでもあればこの上ない喜びであるし、何より「街」のため、「未来」のために大変意義のあることと考える。

参考資料：ガスパール・カサド年譜

年	できごと
1897	9月30日バルセロナに生まれる
1906	ピアニストとして始めて公式の舞台に登場する
1908	バルセロナ市の奨学金を得てパリで、1912年まで同郷の名チェロ奏者パブロ・カザルス(1876-1973)のレッスンを受ける。大戦前の働き盛りのカザルスが教えた生徒はスツジャ、キスジャン、カサドのみであった
1914	第一次大戦勃発。ガスパールは父からの作曲指導を続ける 12月25日、日本の須磨で原智恵子生
1918	大戦終結。フランス、イタリアでの演奏活動再開
1921	バルセロナのカタロニア音楽堂でのバッハ作曲「マタイ受難曲」スペイン初演にチェロ奏者として参加
1922	南米演奏旅行で成功。初の作曲作品、チェロとピアノのための「振り子時計と糸紡ぎの女と恋人」を初演
1926	「緑の魔王の踊り」、「無伴奏チェロ組曲」など代表作を完成。カザルス指揮するパウ・カザルス管に独奏者として登場、自作のチェロ協奏曲二短調を初演した
1932	イタリアのシエナでキジアナ音楽院設立に協力する
1937	2月、第3回国際ショパン・コンクールで原智恵子、第15位&聴衆賞獲得
1946	1962年までキジアナ音楽院で教鞭を執る(1954及び55年を除く)
1948	戦後初めてアメリカ合衆国を訪れる。フィレンツェを拠点に頻繁にヨーロッパ各地を訪れ、国際的な活動を再開している
1956	カザルスのパリ・デビュー57周年記念コンサートで、11人のチェロ奏者の一員に加わり師匠の指揮で演奏する
1958	5月、第1回大阪フェスティバルに参加するために初来日。日本各地で演奏会を行う。原智恵子とも共演。
1959	5月9日、シエナで日本人ピアニスト原智恵子と結婚。61歳にして初婚であった
1962	10月、夫妻で来日し、二度目の演奏旅行を行う。小澤征爾指揮NHK交響楽団と共演
1966	11月4日にフィレンツェを大洪水が襲う。被害から街を復興させる資金獲得の演奏旅行中の12月24日、心臓発作のためマドリッドで客死
1969	原智恵子の尽力によりフィレンツェで第1回「カサド記念チェロ・コンクール」開催。岩崎洸が第2位となる
1973	第3回「カサド記念チェロ・コンクール」でミツシャ・マイルスキー優勝
1879	第6回「カサド記念チェロ・コンクール」で上村昇が優勝
1990	第10回「カサド記念チェロ・コンクール」で向山佳絵子優勝。原智恵子は体調不良で帰国。以降コンクールは休止状態となる
1991	カサド資料、玉川学園に寄贈される
1997	玉川大学にてカサド生誕100周年記念祭が開催される。誕生日9月30日及び10月4日の記念コンサートでは、岩崎洸、上村昇、林峰男ら、カサド縁のチェリスト多数が参加。玉川学園に納められたカサドの未発表作品の幾つかが復活初演される
2001	12月9日、原智恵子、青梅市の病院で没
2006	11月、八王子市でガスパール・カサドの名を冠するチェロ・コンクール開催

(おざわ なおひろ)